

看護学生における夫立会い分娩の意識調査

古川 亮子 , 井上 正美
村山 ヒサエ¹⁾, 高橋 初美²⁾

新潟県立看護短期大学, 前新潟県立看護短期大学¹⁾, 新潟県立中央病院²⁾

The research of this college student's consciousness
about a husband helping his wife when she gives birth to her baby

Ryoko FURUKAWA, Masami INOUE
Hisae MURAYAMA¹⁾, Hatsumi TAKAHASHI²⁾

Niigata college of Nursing, Niigata Prefectural Center Hospital²⁾

Summary We have researched into how nursing students acquire motherhood for themselves and their job nursing with the husband helping his wife when she gives birth to her baby.

We used questionnaires and papers from the first to the third grade in my school. The results showed that the higher the grade, the fewer the affirmative views and the more pro and cons for it. And the third grader can think more concretely than the other graders with their experience seeing a delivery. Then we could know that experience seeing a delivery and thinking about a delivery themselves are very important in forming their motherhood.

要約 私達は、看護学生が将来の自分のために、また看護という職業のために必要となる母性を、どのように考え母性を獲得していくのかを、近年需要が高まっている夫立会い分娩をもとに調査することとした。

調査方法は、看護学生1年生から3年生までを対象に、レポート・アンケート調査を行った。調査結果は、学年の進行度が上がるに従い、夫立会い分娩について肯定的な意見が少なくなり、賛否両論が増えてくる。また、3年生は分娩見学を終えることで、1・2年生に比べ、分娩について具体的に考えられていった。これらから、出産場面に立ち会う機会を実習体験することにより、自分が出産に対しどのように感じたかを自分自身に問いかける事は、学生自らの母性意識を発展させていく上で重要であることが分かった。

Key words 看護学生 (Nursing students),
夫立会い分娩 (The husband helping his wife when she gives birth to her baby)

I. 緒言

戦後の高度成長期を通じ、現代の日本の家族形態・家族の機能・家族間が大きく変化し、それに伴い結婚・妊娠・出産についての考え方も変化してきている。

このような社会で育ち、これから看護に携わっていく看護学生は、どのように自分の母性を身に付けていくのであろうか。また、看護学生達が出産場面に立ち会い、自分がどのように感じそれを自分自身に問いかける事は、自らの母性意識を発展させていく上で重要となるのではないだろうか。今回、多々ある出産様式の中でも、近年急激に需要が高まっている夫立会い分娩についての看護学生の意識を調査し、夫立会い分娩からみた夫・妻の役割、看護学生の母性に対する認識及び意識について調査することとした。

II. 研究方法

1) 調査対象

本学看護学生	1年次生	98名
	2年次生	98名
	3年次生	96名

2) 調査期間

平成9年5月～平成9年9月末日

3) 調査方法及び内容

調査方法は、アンケートによる質問形式とレポートによる。

アンケート内容については、各学年の特徴(学習進度など)を考慮した上で設定する。

① 1年生へのアンケート項目

- 夫立会い分娩のことを知っているか
- それは何から知ったか
- 夫立会い分娩についてのあなたの意見は、以下のうちのどれか
大変良い／良い／どちらでもない／あまり良くない／悪い
- 3.について、どうしてそう思うか
- 立会い分娩における夫の役割をどう思うか

② 2年生へのアンケート内容

- 夫立会い分娩についてのあなたの意見は、以下のうちのどれか
大変良い／良い／どちらでもない／あまり良くない／悪い

2.1.について、どうしてそう思うか

3.立会い分娩における夫の役割をどう思うか

③ 3年生へのアンケート

- あなたの見学した分娩は、夫立会い分娩だったか
大変良い／良い／どちらでもない／あまり良くない／悪い
- 実際に分娩を見学して、夫立会い分娩についての意見はどうか
大変良い／良い／どちらでもない／あまり良くない／悪い
- 2.について、どうしてそう思うか
- 昨年提出した夫立会い分娩の課題レポートとの意見の相違はあるか
- 立会い分娩における夫の役割をどう思うか

4) 分析方法

分析方法は、川喜田二郎氏のKJ法、統計処理はMicrosoft Excelを用いる。

III. 結果

1) 調査回答数

調査数における回答率は、1年生95名(96%)・2年生89名(91%)・3年生59名(61%)であった。3年生の回答数が他学年生に比べて低くなった背景としては、アンケート内容が臨地実習での分娩見学終了後に行ったために、実際に分娩見学を出来た学生が59名と少なかったことによる。

2) アンケート内容結果

① 「夫立会い分娩」の認識度と情報源

1年生では、夫立会い分娩について知っているものは全員であった。(図1)

また、その情報源については、テレビが75人(78%)、本・新聞13人(12%)、学校の授業7人(9%)、叔母(助産婦)から聞いた1人(1%)となっている。学

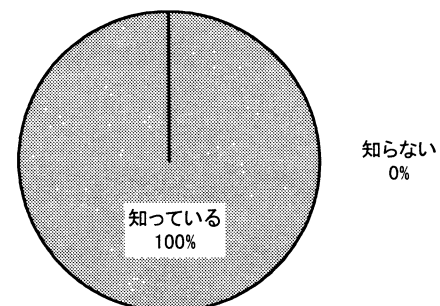


図1. 「夫立会い分娩」の知名度 (1年生)

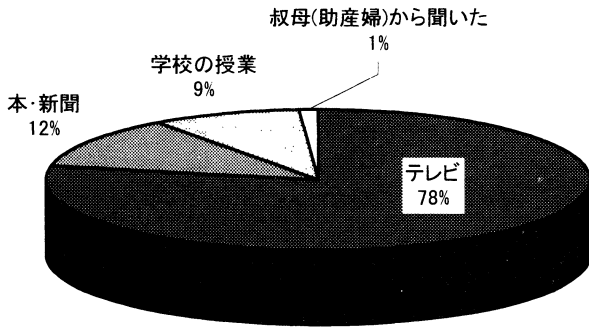


図2. 「夫立会い分娩」の情報源 (1年生)

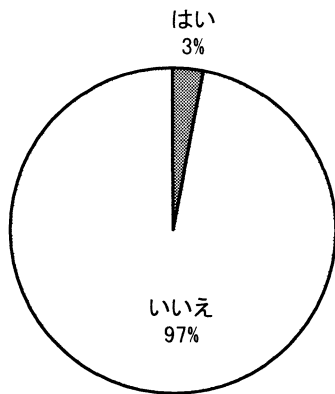


図3. 分娩見学時の「夫立会い分娩」の有無 (3年生)

生達は、多種多量の情報を、テレビや新聞などから得ていることが分かる。(図2)なお、2年生と3年生は母性看護学講義にて夫立ち会い分娩について学習しているため、情報源についてのアンケートは行わなかった。

② 「夫立会い分娩」見学の有無

臨地実習での夫立会い分娩見学をした者は、母性看護学実習を終えた3年生59名中2名(3%)にすぎなかった。(図3)

③ 「夫立会い分娩」についての意識

「夫立会い分娩」についての学年別の意識をみると、1年生では大変良い・良いと肯定的な意見が72%に対し、2年生では68%、3年生では52%と学年が上がるごとに少なくなっている。また、あまり良くない・悪いという否定的な意見については、3年生が11%と最も多く、ついで1年生5%、2年生2%となっている。どちらでもないという意見は、3年生が37%と多く、2年生29%、1年生23%となっている。(図4)

④ 「夫立会い分娩」についての意見

「夫立会い分娩」についての意見を自由記載されてみると、

1年生では、「妻への励まし」、「励ますのは夫が一番」、「夫婦家族の絆が強まる」、「二人の子供という実感が湧く」、など肯定的な意見が多くみられている。(表1)

2年生では、「男性も出産の過程を知るべき」、「分娩室は女にとって修羅場であり夫が社会の修羅場の中で一人で戦っているのだから妻も自分一人で頑張るべき」、「夫に見られたくない」、「恥ずかしい」、「立ち会う効果は夫と妻の性格と分娩時の状態による」、など1年生よりは賛否両論という意見が増えてきている。(表2)

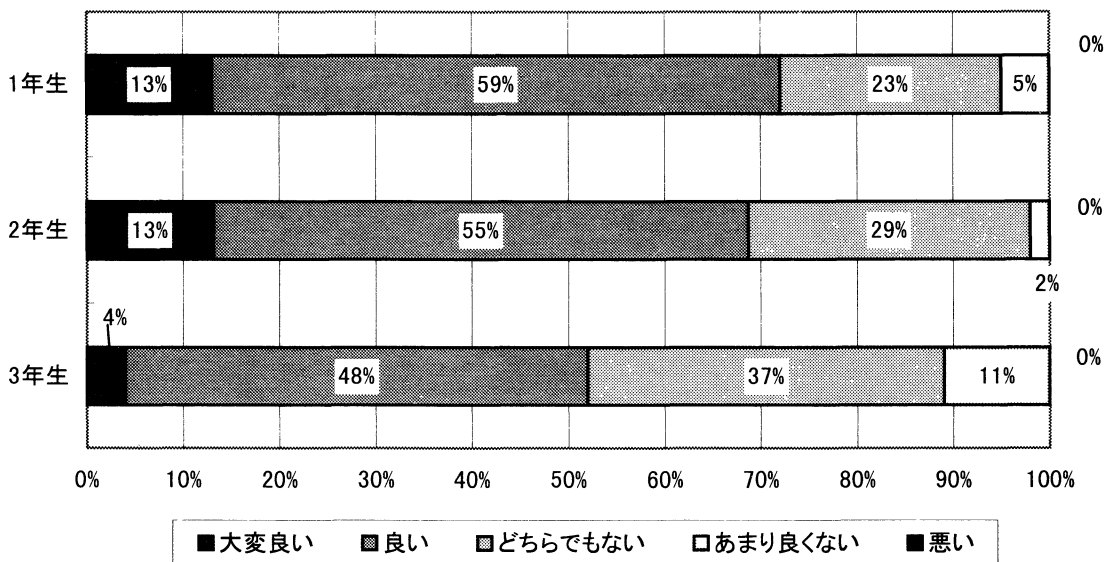


表1. 「夫立ち会い分娩について」の意見（1年生）

- ・妻への励ましと安心感を与える
- ・夫に出産の大変さを知ってもらう
- ・二人の子供という実感が湧く（夫の子供への愛情が湧く）
- ・夫婦の絆が増す
- ・誕生の感動を分け合える（二人の子供だから）
- ・恥ずかしい
- ・夫に育児をする意識を持たせる（父性形成に役立つ）
- ・出産の瞬間を一緒に見られる
- ・分娩は女性だけのものではない
- ・夫が気持ち悪いという気持ちを持つことがある
- ・まだ考えたことがないからよく分からない
- ・出産はきれいなものとは言えない
- ・家族の絆が深まる
- ・夫にはどっしりと構えて待っていて欲しい
- ・苦しんでいる姿を見られたくない
- ・妻の苦しんでいる姿を見る夫は辛いと思う
- ・賛否両論
- ・励ますのは夫が一番
- ・そばにいて欲しい

表2. 「夫立ち会い分娩について」の意見（2年生）

- ・夫が側にいるだけで妻の心の支えになる
- ・分娩時だけでなく、妊娠中からも安心していられる
- ・男性も出産の過程を知るべき
- ・夫に見られたくない、恥ずかしい
- ・心理的ショックが強すぎて夫が立ち直れないことがある
- ・夫婦共に強く希望し、夫に十分な産前教育がなされているなら、父としての役割意識・夫婦間の信頼関係を深めるためにも良い
- ・分娩室は女性にとって修羅場である。夫が会社という修羅場で戦っているのだから、妻も一人で頑張る役目を果たしてもいいのではないか
- ・誕生という感動する場面に接することが出来たり、例えそれが不幸な分娩になっても第三者として医療者の行為を正しく見れる
- ・夫立ち会い分娩の効果は夫と妻の性格、分娩時の夫と妻の状態で左右される
- ・じっくり話し合い、女性の性・生理的な事について理解しあった上で納得して決断したのならいいと思う

表3. 「夫立ち会い分娩について」の意見（3年生）

- ・妻の不安軽減
- ・夫の性格や妻の状態によって、立ち会いについて考えるべきである
- ・両者（夫と妻）の同意があることが条件
- ・夫は立っているだけならば必要ない
- ・知識がなければ邪魔になる
- ・生まれてすぐの赤ちゃんはグロテスクであり、反って愛着が持てなくなることもある
- ・夫ではなく、助産婦や看護学生のケアでもいい。沢山人がいると邪魔になる
- ・「すごく良い」にしなかったのは、分娩第Ⅰ期途中で「もういいよ」といって立ち会いを断った事から、出産を見られたくないという、恥ずかしい気持ちももっている事が分かった
- ・ある程度の知識を持ち、ビデオなどを見て学習している看護学生にとっても、驚いたりする事があるのに、夫はショッキングな出来事に耐えられないと思う
- ・女性にとって出産は命懸けである。その大変さをその場にいる事で、男性にも分かってもらえる。夫がいることは精神的な支えになる
- ・今後の育児にも影響する

表4. 「夫立ち会い分娩」における夫の役割についての意見（1年生）

- ・妻が励まされる（妻の精神的な支えになる）
- ・夫が自分の責任を自覚する
- ・夫が自分の無力さに気付く
- ・夫婦協力していると言う実感が湧く
- ・女性ばかりで恥ずかしいし、戸惑う
- ・本当の夫の姿勢が分かる（たくましく励ます人、血を見て倒れそうになる人）
- ・夫が父親になる、大切な立場
- ・何も出来ないが、出来る限り励まし見守る
- ・妻が望むなら、一緒に頑張るのは当然の立場
- ・自分でも感動を分け合う立場
- ・ビデオなどを撮ったり、大騒ぎしていたら反って気になる
- ・女性を尊敬する
- ・学習しなければならないので大変
- ・尊い立場
- ・苦しむ妻に勇気を与える
- ・責任感のある夫
- ・夫婦は共に助け合うべきで良いことだが、夫の立場からするとあまり見たいものではないかもしれない

表5. 「夫立ち会い分娩」における夫の役割についての意見（2年生）

- ・妻の精神的な支えになる。が、いざ立ち会おうと決めたなら、夫はその役割について知り、妻がどのような状態になっても受け入れる態度を持つことが大切。
- ・立ち会うための社会面での心配（仕事の時間の制限・会社からの目）や、分娩室で妻に何もしてあげられない不安を感じるかもしれない
- ・ただ単に立ち会いたい・側にいたいだけでは医療者をいらいらさせたり、妻に不安を与える原因になるので妻をバックアップできるような十分な前教育が必要
- ・妻は分娩に必死でテンションは高いが、夫は妻ほどテンションは高くないし、励ますにしても頑張れとしか言えないと思うのでかわいそうだ
- ・妻が安心して出産できるようにサポートすべき。また、喜ぶ時には十分表現し、それまでの苦痛・不安を取り除けるようにすべきである
- ・妻と共に分娩するという家族意識があるかもしれないが、何も出来ないと孤立してしまうかもしれない
- ・夫がいてもいなくても変わらない

表6. 「夫立ち会い分娩」における夫の役割についての意見（3年生）

- ・妻の精神的な支え（産婦の産もうとする力を増加させるエネルギー）
- ・その後の育児・パートナーへの意識が分かる
- ・知識がなければ邪魔になる
- ・分娩室で居場所の無さを感じる
- ・医療者の処置への恐怖（出血などに対し気分が悪くなる）
- ・妻の苦しむ姿を見るに見かねるという思いになる
- ・膣からベビーが出てきたら、今後の夫婦生活にも影響がある
- ・冷静に対処できないと、妻は余計気をもむ
- ・何かしてあげたいが、代わりに出産できないのでいたたまれない
- ・いてもいなくてもあまり変わらない
- ・励ます存在
- ・分娩室で自分の素直な意見を述べられる唯一の人
- ・全部を見られると余計気遣いがあるので、陣痛が辛くなる程度まで一緒にいて、手を握って、精神的サポートをして欲しい

3年生では、「妻の不安が軽減する」、「夫は立っているだけなら必要ない」、「生まれたすぐの赤ちゃんはグロテスクでありかえって愛着が持てなくなるのではないか」、「看護学生でも驚きであるのに夫はショックな出来事に耐えられるのか」、など2年生より分娩に関して細かい視点で「夫立会い分娩」を考へており、賛否両論・否定的な意見48%と肯定的な意見52%ではほぼ過半数の比率になっている。(表3)

⑤「夫立会い分娩」における夫の役割についての意見

分娩時、夫が妻の側に居ることに対してどのように思うかをみる。

1年生の意見では、「妻が励まされる」、「苦しむ妻に勇気を与える」、「一緒に頑張れる」、「夫が父親になる大切な立場」、などがある。(表4)

2年生では、「妻の精神的支えになる」、「妻が安心して出産できるようにサポートする」、「ただ単に立ち会いたい・側にいたいだけでは医療者を苛立たせる」、「夫がいてもいなくても変わらない」、などがある。(表5)

3年生では、「妻の精神的な支えで産もうとするエネルギーとなる」、「励ます存在」、「分娩時に産婦が自分のニーズを気兼ねなく表出できる人」、「医療処置への恐怖・出血を見て気分が悪くなるのではない

か」、「知識がなければ邪魔になる」、などがある。この分娩時の夫の役割については、④「夫立会い分娩」についてが肯定的な意見であれば、⑤夫の役割についても良いイメージを持った意見が表わされており、④と⑤は類似した意見の傾向が見られる。(表6)

⑥分娩実習経験前後の「夫立会い分娩」への意見の差異

本調査対象である3年生が、2年次に夫立会い分娩についてのレポートを提出した時と分娩見学終了後に、意見の相違があったのかについてみる。夫立会い分娩への考え方は変わらないという学生は44%を占めていた。考え方が変わったという56%の学生は、「羞恥心があったが見学後はそれより生命誕生への感動・産婦の頑張りに対しての激励の方が大きい」、「夫の知識の有無に関わらず妻への大きな支えとなる」、「下半身が見えないなら立ち会うのは良い」、「分娩第I期のみ立ち会うのが良い」、「夫にとってはショックである」、などの分娩経過を踏まえた細かな意見が出されている。(表7)

IV. 考察

ここで、今回の調査対象になった学生達の背景をみることにする。

まず各学年の学習進度については、1年生は後期から母性看護学概論1単位30時間を行う。ただし、

表7. 分娩実習経験前後の「夫立会い分娩」への意見の差異 (3年生)

変化なし…44%
変化あり…56%
<ul style="list-style-type: none"> ・初産婦と経産婦では違ってくる ・児娩出の際、下半身が見えない条件でなら賛成 ・知識の有無に関わらず妻の大きな心の支えになる ・長所・短所をどう生かすかで決まる ・分娩第一期のみ立ち会うのが良い ・父性意識にプラスになる ・昨年は羞恥心を感じていた。見学後は、羞恥心というより、生命生への感動・産婦の頑張りに対しての激励の方が大きい ・苦痛を和らげ精神的に安心し、父親の意識が強まると思い賛成だったが、分娩を見て夫にとってのショックが大きいと感じた ・分娩は決して神秘的とはいえないし、冷静でいれる自信がない。家族の結びつきは深まるが、逆にそれを機会に愛が冷めることもあると思う ・分娩についての知識を持った後に二人で決めるべき ・学生の援助に対して「少し安心した」という意見を聞いて、夫が立ち会ったらもっと良いと思う ・反対意見は変わらないが、夫婦の意志で行われることに反対しない。夫が近くにいることで苦しさを乗り切れるし、一生一大場面に関わることが出来る。これは夫婦にとって今後のステップになると感じた ・基本的な意見は変わらないが、男性に分娩の大変さを知ってもらいたいので勧めたい気持ちもある

件数

アンケート調査を行った時点では、母性看護についての講義はまだ受けていない。2年生は、前期に母性保健を1単位30時間行い、ここで正常分娩のビデオなどの視聴覚教材を使い、分娩への理解を深めている。そして、夏期休業前には講義中に学んだ「夫立会い分娩について」のレポートを提出する。後期には、母性臨床看護学1単位30時間の講義と母性看護学実習Ⅰを1単位45時間の学内演習を行う。3年生は、前期に母性看護学実習Ⅱ2単位90時間を臨地実習として行う。以上をもって、母性看護学の全課程が終了となる。

次に、学生達の育ってきた時代の日本の社会構造について考えてみる。学生達の両親が、まさに結婚・出産・育児に取り組んだ時代(1970年代)の日本社会は、高度成長期に向かった急激な変化の結果、極めて同質性の高い社会になっていた。この頃の日本の家庭として一般的な姿は、夫はサラリーマン・妻は専業主婦・子供は二人と「男は仕事、女は家庭」という、男女の固定的役割分業がなされていた世代である。しかし、このような役割分業型家庭生活の中で、母親と子供との親密性が増し、母親の過保護・過干渉という問題に加え、核家族で近所付き合いが乏しい母親達の孤独感・不安感が生み出されていった。このような社会で育った子供達は、高学歴志向に向かい、その結果、経済的にも男女差別が少なく、女性が男性に依存せずとも自立可能になっていった。現在、結婚が永久就職であるという考えや適齢期に対する意識は薄れ、女性の社会進出は以前になく多くなり、結婚・夫婦の形も次第に欧米のような自由な形に向かっている。¹⁾

このような学生達の背景と夫立会い分娩についての調査結果を、学生達の母性意識の発展を根拠に据えて、以下にまとめてみる。

1年生は、まだ母性看護学の講義を受けてはいないものの、テレビ・新聞などのマスメディアから夫立会い分娩の情報を全員が得ている。これは、調査対象が看護学生であり、医学と医療に対して一般人より関心を持っている事によるものと考えられる。また、夫立会い分娩での夫の役割についての理解においても、現代の夫婦の形が欧米型のような夫婦の役割認識をもつものが多くなっていることより、学生達の両親の世代の夫婦像とは違ってきていると言える。

2年生は、母性保健の授業を受けたことで、1年生

よりは夫立会い分娩の利点・欠点について考えられている。夫立会い分娩への意見では、1年生は大変良い・良いと言った肯定的な意見が72%であったのに対し、2年生では68%と低くなっている。これらより、夫立会い分娩が必ずしも手放しで喜べる分娩ではないと考えていることが分かる。

3年生については、母性看護学臨地実習にて分娩見学を終えることで、夫立会い分娩については現実的な視点で見ていることが分かる。これは、夫立会い分娩への肯定的な意見が52%と2年生よりも更に低くなっていること、「見娩出の際に産婦の下半身が見えない場所で立ち会えるのなら賛成」あるいは「分娩第Ⅰ期のみ立ち会えるのが良い」などの意見からも読み取れる。以上の点から、3年生は実際の分娩という現実を知った上で、夫立会い分娩については1・2年生に比べ、具体的なイメージ・知識を持って考えられてきていると言える。ただ、今回分娩実習を行った学生59名中、夫立会い分娩できた者はたった2名(3%)のみであり、結論づける事はできなかった。これより、夫立会い分娩という1つの分娩様式に固執するのではなく、分娩というものを肌で学習体験することが、学生達にとって大きな学びの場となると示されたと思われる。

今回、看護学生が夫立会い分娩についてどのように認識しているかを各学年毎の意見の比較をしてみ、看護学生が母性を学び自分の母性をどのように考え獲得していきけるのかについて、その獲得段階及び発展させていく過程が、多少なりともみられたのではないかと見える。また、妊娠・出産経験がなくても、どのように看護の中に自分の母性を生かしていくのが大切であり、今後の看護学生における母性看護学のあり方について、知識は勿論の事、実習での体験の重要性を再確認することができた。

V. おわりに

女性のライフサイクルの変化や性差別の認識の変容から、男女の性別役割意識は、高度成長期以降、大きく変化してきているといえる。「母性」は通常産む性としての女性が有質としてとらえられ、妊娠・出産し哺乳し得る能力として限定的に理解するものから、女性特有の子育て能力として理解するものまで、その概念はあいまいかつ多義的である。だが、このような「母性」概念の曖昧さの中で、「母性」の果たす役割が過度に強調され、母親のみに過剰な責任を負

わせることになったことは言うまでもない。

現代は、男性が子育てに参加する機会が以前に比べ増えてきてはいるものの、やはり今でも子育ては女性という、日本独特の考え方は根強く残っていると言える。¹⁾

以上より、夫婦協力した姿で分娩に臨む「夫立ち会い分娩」について看護学生の意識を調査した結果、彼女達は将来の自分達のための「ペアレティング (parenting: 親業)」²⁾や看護の中における母性看護の特性について考え、母性意識の発展を促す機会となったといえる。

分娩の試み、ペリネイタルケア 17(7)、メディカ出版、597~601、1998

- 13) ミシェル・オダン・鈴木江三子:「よりよい出産の環境を考える」、ペリネイタルケア 16(1)、メディカ出版、7~21、1997
- 14) 川喜田二郎: 発想法、中公新書、3~220、1967
- 15) 川喜田二郎: 続・発想法、中公新書、2~313、1970
- 16) 池下久弥: 男が読む妊娠・出産・育児の本、法研、1~207、1994
- 17) 正木かよ: 夫婦でいいお産をしよう、メディカ出版、14~323、1990
- 18) 及川和男: いいお産、したい、桐書房、1~261、1991
- 19) 寺田恵子: らくらくお産、立風書房、7~90、1992

<引用文献>

- 1) 厚生省: 厚生白書、ぎょうせい、4~107、1998
- 2) Jeannette L. Sasmor: CHILDBIRTH EDUCATION: A Nursing Perspective、医学書院、1~33、38~78、1983

<参考文献>

- 1) 竹内美由紀・田中真美ほか: 夫立ち会い分娩の意識調査、第27回日本看護学会集録(母性看護)、29~31、1996
- 2) 佐藤明美・田中寿賀子ほか: 陣痛室立ち会い分娩後の夫の気持ちの変化、第27回日本看護学会集録(母性看護)、32~34、1996
- 3) 二藤尚子・永田幸子: 夫立ち会い分娩における分娩前後の夫の心理の変化、第27回日本看護学会集録(母性看護)、35~37、1996
- 4) 大西アヤ子・谷川安子ほか: 夫立ち会い分娩をしない夫婦の意識、第27回日本看護学会集録(母性看護)、38~41、1996
- 5) 安藤正子・有井良江ほか: 周産期における父性意識の発達と影響を与える要因、第27回日本看護学会集録(母性看護)、42~45、1996
- 6) 木村千里・松岡恵: 父親の分娩への没入行動の変化と助産婦の言語的かかわり、日本助産婦学会誌 9(2)、139~142、1996
- 7) 二宮恒夫: 夫が「父親」になるためのサポート、助産婦雑誌 49(7)、医学書院、537~542、1995
- 8) 二宮恒夫・尾方美智子ほか: 妻達から夫達への要望、助産婦雑誌 49(7)、医学書院、543~549、1995
- 9) 小出晴美・荒木佳子ほか: 倉敷中央病院の両親学級・立ち会い分娩の実際と夫の意識変化、助産婦雑誌 49(7)、医学書院、564~569、1995
- 10) 杉本千代: 江東区の「親学入門」、助産婦雑誌 49(7)、医学書院、570~575、1995
- 11) 白井雅美・渡部節子ほか: 父性意識に関する文献研究、母性衛生 37、283~288、1996
- 12) 田村幸子・山先智子ほか: 大学病院における夫立ち会い